



Title	「懷徳堂本昌平覺書生寮姓名録の公刊にあたって」 (本誌第四十二號) の補正
Author(s)	梅溪, 昇
Citation	懷徳. 1973, 43, p. 16-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90507
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

○子貢曰、「如有博施於民、而能濟衆、何如、可謂仁乎」、子曰、「何事於仁、必也聖乎、堯舜其猶病諸、夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人、能近取譬、可謂仁之方也已」(雍也)

この文の傍點の部分も、「恕」を言っていることは明かであって、子貢との問答における孔子の答えであることは、上掲衛靈公篇の子貢と孔子との問答における孔子の答えに「恕」を説いているのと軌を一にしている。子貢の聞いたところでは、「仁」の内容としての修爲は「恕」であって——上掲顔淵篇によれば、仲弓の聞いたところも亦「恕」であつたらしく——、曾子の様に特に「忠」を添えて強調しなかったのかもしれない。

ともかくこのように、「恕」もしくは「忠恕」は「仁」の内容としての修爲それ自身であるが、前述の如く、「忠信」は「仁」の素材でこそあれ、未だ直ちに「仁」とするには足らず、更に「好學」という要素を加えて一層の修爲に力めることが必要であつた。してみれば「恕」というのは、「忠信」に「好學」を加えることによって形成されたところの、「仁」の内容としての修爲なのではなからうか。「己の欲せざるところは人に施すことなかれ」という「己を推して人に及ぼす」修爲は、自己を欺かない誠實さとしての「忠」を擴充して、他人を欺かない誠實さとしての「信」と統一させた総合的な立場なのではなからうか。さればこそ「忠」と「信」という靜態的・内外並立的な素材の概念を越えて、「恕」は動態的、内外統一的な仁の修爲と見られるのではなからうか。

「懷德堂本昌平醫書生寮姓名錄の公刊にあたって」(本誌第四十二號)の補正

東京大學史料編纂所所藏の「書生寮名簿」(寫本)の出自は不明と記したが、その後沼田次郎氏を通じて桃裕行氏の御教示を受け、また伊東多三郎氏よりも直接御教示をえた。それによると史料編纂所本は故高瀬代次郎氏の舊藏本(新寫本)で、當時赤門前の木内書店から他の儒學史料と共に購入されたことが判明した。なお本件については、伊東多三郎氏「江

戸時代後期の書生史管見」(『日本歴史』昭和四十七年正月號)の註にふれられている。また同氏によれば岡鹿門(仙臺士、昌平校の舎長)の子孫に傳つたものは日比谷圖書館に入つた由である。以上の次第で、石川博士の用いられた姓名簿についての推察も今後再検討したい。

(昭和四十八年九月記)